

令和4年度津山工業高等専門学校有識者懇話会要旨

- 1 日 時 令和4年11月25日（金）13時30分～16時30分
- 2 場 所 津山工業高等専門学校 総合理工学科南館2階 会議室
- 3 出席者

【委員】

鶴崎委員（美作大学学長）、松本委員（美作地区中学校長会会長）、谷口委員（津山市長）、木原委員（日本原子力研究開発機構人形峠環境技術センター所長）、松本委員（津山高専技術交流プラザ会長（代理））、末澤委員（津山高専同窓会会長） ※欠席：松田委員（津山商工会議所会頭）

【学校関係者】

岩佐校長、藪木教務主事、塩田学生主事、細谷寮務主事、佐々井副校長、小西専攻科長、香取地域共同テクノセンター長、山口国際交流センター長、西尾教育システム点検委員会委員長、寒川事務部長、井上総務課長、石井学生課長、竹中総務課課長補佐、横山総務課課長補佐、土屋学生課課長補佐、野村企画・連携室長

議事に先立ち、校長から挨拶の後、出席者の紹介が行われた。その後、委員の互選により、鶴崎委員が座長に指名された。

4 主な意見交換内容

校長をはじめ、本校関係者から本校の現状と課題等について説明が行われた。それに対し、次のとおり質疑応答及び意見等が出された。

- 津山高専におけるソーシャルワーカーやスクールカウンセラー等の人材確保の方策については、原則公募としている。しかし、公募のみではなかなか集まりにくいと、津山市教育委員会と連携して人材確保に取り組んでいる。今後は県との連携も視野にあらゆるネットワークを利用して適任者を探す取組みが必要になってくる。
- より複合的な領域に対応できる人材の育成を目的として、総合理工学科に改組して6年目となっている。工学は非常に広い分野であるため、基礎である数学・生物・化学の理学分野をしっかりと学んだ上で工学を学修するようにカリキュラムが構築されている。中学校からは、総合理工学科の中でも先進科学系の人気が高いため、より一層工学の広がりを見せていくことが考えられる。進学に関してもこれまで工学部への編入が多かったが、直近では岡山大学理学部に7名合格するなど、工学、理学を含め多くの人材を育てていきたいと考えている。

- 総合理工学を改組したことにより、従来は機械工学・電気工学といった専門性が分化されていたが、近年は1学科でさまざまな専門分野を学べる体制を取る学校が多くなってきている。本校の特徴としては、さらに進化して理学の要素を入れている数学・理科・化学の教員も卒業研究を行っており、今後は他の高専も同様の流れになっていくと考えられる。
- 理系社員が経営のマインドを身に着けるとビジネスマンとして鬼に金棒になると考えている。今後カリキュラムの中にマネジメント、経営の要素を入れる可能性について、近年は、高専の高度化の中に「イノベーター」というキーワードが出ており、マネジメント力、経営力が求められる時代になってきている。それらの分野の有識者を招いた授業を実施するようなカリキュラムの変更も今後の検討課題とする。
- 広報活動について、津山高専50周年記念の際に刊行した「われら津山高専卒業生」を中学校への広報の一環として活用し、高専卒業後の進路の選択肢の多様性をアピールする。また、高専制度創設60周年記念誌に本校から2名のOBが選出されているため、広報活動に使用して欲しいとの提案があった。
- 津山市からの提案として、行政課題の解決の一環である津山市の土木課で実施している道路整備や交通量調査・インフラの点検等について、津山市から支援を行い、津山高専からは技術的な指導・支援し、共に事業を推進していきたいと考えている。
- 文部科学省が令和5年度概算要求のデジタル人材育成事業（基金）は、学部学科等の新增設は既存の学部の再編による増員が基本であると考えられているため、デジタル人材の育成を行うための機能強化（定員増に向けて）について、津山市と協力した取り組みを考えている。これに加え、スタートアップ人材の育成について、各高専に1億円の交付が行われる予定であるが、高専技術交流プラザと協力し高専機構や文科省にアピールしたいと考えている。
- 情報分野に通じた人材は、地元産業や行政に密着して課題を見つけることができ、情報分野で協力していけるため、必要と考えている。また、新しい商品やサービスを1番早く受け入れる「イノベーター」としての起業家マインドを持った人材育成する必要がある。今後は、機構本部や地域の方と相談し、情報人材の育成やSDGs等にも対応した総合的な力を発揮していきたいと考えている。
- 美作地区の中学校は、10年ほど前に「県北生徒の理科教育の充実に係る事業」に高専がイニシアティブを取り、公開講座やジュニアドクター育成塾を含めた多くの事業を実施したため、美作地域に実験を含めた理科を好きになっていく生徒が増えたと感じている。進路については、県北では最難関校の位置づけとなっており、理科に強い興味を持った目的意識の高い生徒が受験している。また、難関ということから推薦では半分以上が不合格になる実態があり、不合格になった学生が一般入試で合格するのは難しい実情がある。津山高専の取り組みを生徒に紹介し難関な受験にもチャレンジしていく生徒を育てたいと考えている。県北では高校の倍率の要因

もあるが、美作地区全体として高校入試に対する危機感が薄いと感じている。

- 津山高専は県北では「難関」と呼ばれていることについて、学校側としても受入れに工夫し、また入学後も勉強は難しいという印象付けをできるだけ避け、勉強は楽しいという印象を持てる教育ができるように内部改革を進める。推薦入試を含め理系に興味を持っている多くの学生に本校を受験して欲しいと考えている。
- 難関と呼ばれることは、それだけ津山高専の役割がはっきりしていることと子供たちの理解に対する喜びをしっかりと受け止めていると推察される。今後も公開講座等を大いに推進していただくことが地域の発展に繋がると考える。
- 難関と呼ばれることはうらやましいことで、それだけ事業と役割がはっきりしていることと子供たちの理解に対する喜びをしっかりと受け止めていると推察される。今後も公開講座等を大いに推進していただくことが地域の発展に繋がると考える。
- 実践的な技術者の育成について、知識や専門的な技術の育成、生活面をサポートし人間形成について努力されていることについて、高専の教員と企業のニーズのマッチングを行い、それを核に共同研究に発展させ、外部資金の獲得や学生の繋がりにも発展することができると考えている。
- 高専側のシーズが企業側のニーズから少し外れていると合わないとして企業側から断ってしまうケースが多いことが課題であると考えている。この2つがピッタリとマッチングすることが稀であるため、企業サイドからより多角的な観点からマッチングの方法を探したいと考えている。また、津山圏域に就職する学生を増やすため、津山地域に新卒で入社したいと学生が思える魅力的な企業となるように企業サイド側で努力していくことが必要だと考えている。
- 地元で就職する学生が少ないとの意見があったが、高専の学生は「一度広い世界を経験したい」との思いから都会での就職を希望するケースがほとんどである。何年か社会人経験を経たのちにUターンで津山圏域に就職を希望するケースが多いと思われる。また、津山市でUターン就職の斡旋を行っており、卒業生から相談があった場合は、その学生の適正に見合った就職先を紹介して欲しいと考えている。

最後に、座長から本日のまとめの発言があり、続いて校長から謝意が述べられた。